

戦いごっこは幼児になにをもたらすのか

幼児教育選修 水野花梨

I. 問題と目的

幼児における遊びの中には様々なごっこ遊びがある。その中の一つとして、戦いごっこがあげられる。保育者によっては、戦いごっこを禁止すべきという考えをもっていることもある。戦いを表す遊びにはもちろん安全面が危ぶまれることもあり、保育者にとって捉えづらい遊びかもしれない。しかし、歴史ある戦いごっこに潜在している発達意義を簡単に見逃すことはできない。

そこで、本研究では、アンケート調査・事例考察・聞き取り調査といった3つの研究を行う。そこから、改めて戦いごっこの必要性を見直し、保育者のすべき援助（環境・声かけ・アクション）を考えて行きたい。

II. 研究内容

1. アンケート調査

研究方法

- ・対象者…20代の男女70名ずつ
- ・アンケート内容…『幼児期に好きだったアニメやヒーローもののキャラクター』、『戦いごっこをした記憶はあるか』、『その記憶にまつわるエピソード』、『戦いごっこを行っていた環境』、『戦いごっこがその後の自分に与えた影響』

結果と考察

「戦いごっこの経験があるか」「好きなキャラクターとごっこ遊びの内容がリンクしているか」「戦いごっこに関する保育者とのやりとりが記憶にあるか」「トラブル・ケンカ・ケガが記憶にあるか」「戦いごっこをしていた場所」「戦いごっこがその後の自分に与えた影響」の6点について男女で比較し、グラフ化して考察した。

—男女比について—

男性の方が詳細まで述べられており、記述量が多かった。戦いごっこの経験がある割合も、男性は87%、女性は37%とその差は明らかであった。また、女性は白紙や、覚えていないという人も多く、戦いごっこをしていた人であっても、その詳細を覚えている人はわずかであった。このことから、戦いごっこがいかにか男の子に親しまれてきたかがわかる。女の子であってももちろん戦いごっこに親しみをもつ子もいると思うが、戦うことよりも、キャラクターに憧れる思いから、なりきることを楽しんでいることが多いのだと考えた。

—子どもに与える影響について—

男女ともに、戦いごっこをする中での人とのかわりが学びにつながったと述べる人が多くいた。年齢にもよると思うが、戦いごっこは、単に好きなようにセリフを言い好きなように動くのではなく、周りの友達とのやりとりが関係してくることが多い。その中で衝突を繰り返し様々なことを学んでいる。「役割やルールの決め方」「相手を思いやること」「相手の痛みを知り、手加減を覚えること」など友人とのやりとりを通して学ぶことが多いようだ。「ケガをする」「仲間に入れず嫌な思いをする」「内向的になってしまった」など、戦いごっこを通して子どもに与える影響の中で、マイナスとなるものも一見あるように見える。しかし、このどれもが保育者の援助に関係しており、援助の仕方によっては回避できるものであると考えた。

—保育者の援助について—

戦いごっこが子どもに対してプラスの影響のある可能性も見えてきた。しかし、戦いごっこが子どもにとってプラスになるかどうかは保育者の援

助次第であると実感した。以上のことから考えられる保育者の援助について以下の表にまとめた。

★子どもたちがどこでどのように遊んでいるか把握すること（特に遊具の周り。ケガの防止のため）
★子どもが心から楽しんで戦いごっこをしているのか判断する
★環境を整える（道具や場所）
★「注意する、止める、叱る」には気をつける
★一緒に楽しむ

2. 事例考察

研究方法

・対象者…名古屋市立A幼稚園4歳児、名古屋市立B保育園3・5歳児 ※A幼稚園では、広場や自由に使えるマットなどがある。B保育園では、室内で過ごすことが多く、机が常に出ている。など、二園では環境の違いが大きい。

・観察方法…A幼稚園では遊びに参加せず、観察をし、記録をとる。B保育園では参加観察と言う形で遊びに加わり、保育終了後、記録をとる。

結果と考察

—3歳児の戦いごっこについて—

3歳児では、遊ぶ相手がいる、という意識もあまりなくなりきることに夢中であり、自分の世界観をもっている。友達とイメージを共有することがまだ難しく、かっこよく見せたいという思いが強い。見た目もアニメのキャラクターに近づけたいという思いがあり、様々なブロックなどの身の回りの物を使いなりきる姿がよく見られる。

—3歳児に対する保育者の援助について—

子どもがこの遊びでかっこよくなりたいという思いをもっているということを受け止め、「かっこよく変身できたね」などと声かける。また、少しずつストーリー性をもった楽しみ方も見出せるよう、時期を見計らって相手を意識できるような声かけもできたら、と考えた。しかし、時間や場所を関係なく突然なりきを始めてしまうので、今、すべきことを子どもが理解できるよう保育者が声をかけることも必要である。

—4歳児の戦いごっこについて—

戦う相手や仲間など、周りの人間を意識してともに遊んでいる。保育者の援助が無くても、遊びへ仲間入りをしたり、小さなトラブルを解決したりすることもできる。自分たちで設定を話し合い、キャラクターをイメージし、確認しながら遊びを進めることもあるようだ。音楽やマット、跳び箱など、自分たちで身の回りの環境を利用して遊びを広げていく。しかし、他の遊びと衝突することや、危機管理能力が不十分なこともある。

—4歳児に対する保育者の援助について—

ある程度は自分たちで解決したり話し合ったりする力を少しずつ持ち始めたため、介入しすぎず見守ることも大切である。危険の潜む場面であっても、すぐに止めたり手を出したりしまわず、極力自分たちで「これは危ないんだ」と気付けることを狙いとして保育をしていくことも必要である。

—5歳児の戦いごっこについて—

イメージの共有を話し合うことでできるようになっていくが、共有しきれず遊びにずれが生じたり、そのまま一人が独断で遊びを進行したりしてしまうこともある。しかし、子どもたち同士で内的なルールを決め、共有する力をもっていると考えられる。戦いごっこを始めよう！と思い始めるよりも、アニメの話題やブロックで作ったもの、などで子どもたちは色々なひらめきをし、戦いごっこにつなげていくことが多い。男児はポーズやセリフなどに重点をおくよりも、「強くありたい！」という思いを年少・年中よりも持っている。そのため、実際に体をぶつけあうことで、よりリアルな戦いを味わおうとし、力の強さを顕示したいという思いがあるのではないか。そこで、力を強くしすぎたり、相手に痛い思いをさせてしまったりする可能性も大きく、そこで現実と空想の世界が曖昧になり、遊びが崩れてしまうこともある。それだけでなく、他の遊びまでも崩してしまう恐れがあることもわかった。

—5歳児に対する保育者の援助について—

力をぶつけることで強さを示したい、という年

長男児特有の思いを受け止め、乱暴な行為全てを否定しないようにしたい。しかし、相手の痛い思いや、嫌な気持ちを理解できるよう伝えていきたい。また、力をぶつけあうことでトラブルにつながっていく可能性が高いということを頭に置き、そのトラブルも極力子ども同士の話し合いによって解決できるよう見守ることも必要である。そして、戦いごっこは、いつどこで始まるものかは決まっていはいない。そのため、戦いごっこと他の遊びが崩れあってしまう危険性もある。どの遊びもその遊びを行っている子どもの思いが崩れないようにするため、遊びに合わせて場所を確保する必要があるのではないかと。コーナーで分けることも一つの手である。特に戦いごっこには体をのびのびと動かすことのできる広い環境が望ましい。

3. 聞き取り調査

研究方法

・対象者…現在1年目の保育者4名（3歳児クラス1名、4歳児クラス2名、5歳児クラス1名）に対し、集団聞き取り調査を行った。ICレコーダーで録音し、その後逐語起こしをした。

・質問内容

*自分の園やクラスで戦いごっこが行われているか。→行われている場合、何歳児クラスでどのように行われているか。→行われていない場合、その理由は何か。

*戦いごっこのメリット（どんな育ちを助けているか）は？また、デメリット（戦いごっこを行う上での問題点）は？

*戦いごっこにどのようにアプローチしているか。

*自分の幼少期に戦いごっこを行った経験があるか。

*戦いごっこを行う男女比はどのようであるか。

*今後戦いごっこはどうなると思うか、どうなるとよいと思うか。

結果と考察

戦いごっこは、どの園、年齢においても自然に

行われる遊びであるようだ。戦いごっこのメリットとしては、「なりきる力」「友人関係の育み（人間関係の学び）」「安心できる居場所作り」「発想・想像力の育み」「ルールや公平さの学び」などがあげられたが、デメリットとして、「他の遊びと崩れあう危険性」「ケガをする・させる」「配役などの不公平さ」などがあげられ、トラブルに繋がることもあることが分かった。

また、一緒に楽しむだけでなく、ねらいを持ちながら遊びに加わることを意識しているようだ。ダンボールなどを用意するなどちょっとした援助で子どもの発想力を引き出している。トラブルが起きそうな時にも、自分で気付けるよう、自分から保育者に言えるような援助も心がけているようだ。自分の幼少期の戦いごっこの記憶から、メンバーにこだわりをもっていた、という意見もあげられた。子どもの「この子と遊びたい」という思いの表れを大切にしていきたいと感じた。そして保育者たちは、今後、戦いごっこは子どもがヒーローやアニメのキャラクターに興味をもち、憧れ続ける限り、無くならないと考えている。テレビやメディアが大きく変わらない限りその憧れは存在し続けるであろう。子どものしたい遊びをさせてあげたいという思いを大事にすることは、子どもから自然と生み出る戦いごっこを認めていくことに繋がっていくと考えている。

まとめ

三種類の調査から、戦いごっこの意義として多くのものが考えられることがわかった。

最も大切なのは人間関係の学びである。配役や、遊びを進行するにあたっての内的ルールなど、戦いごっこには話し合う機会がとて多く存在している。単に話し合う機会であれば、他の行事や遊びであっても存在しているとは思いますが、戦いごっこは子どもたちから自発的に生まれた遊びであり、したい遊びであるからこそ、自分たちで話し合っ決めていくことにより真剣に取り組むのではないかと。その中でトラブルが起きることももちろん

あると思うが、年齢によっては自分たちで解決していく力を身につけていくよいきっかけにもなる。話し合ったり揉めたりと、色々な段階を経て遊びを楽しんでいることから、友人との心の繋がりも次第に感じられると思う。また、人との繋がり意識がまだ薄い3歳児であっても、かっこよく見せたい、憧れのヒーローに近付きたいという思いをもって遊んでいる。その思いを前面に出せる遊びが戦いごっこなのではないかと思う。したい遊びができるということは子どもにとって大切なことであり、安心できる居場所をつくることにも繋がるのかと考えられる。

また、「戦い」ということから、危険である、という思いを抱く人も多くいると思う。現にケガをした経験のある人もおり、安全であり平和な遊びであるとは言い切れない。しかし、そのような経験を踏まえて危機管理能力が育つこともある。子どもの育ちにマイナスとなる危険な経験を防げるかどうかは戦いごっこの有無というより、保育者の援助次第であると考えた。保育者の援助として、戦いごっこをしている子どもが心からしたい遊びでしているのかどうかの見極めが大前提として必要である。したい遊びとして戦いごっこを行っている場合、子どもがどのような思いを出そうとしているのかを読み取り、その思いを満たせるよう子どものイメージにあった言葉かけをしていきたい。そして思いを満たすだけでなく、明確なねらいをもって望ましい姿へ成長していけるよう援助していきたい。また、戦いごっこをより安全に楽しく行うために、環境を整えることが保育者にとって大事な役目であることがわかった。まず、思いきり体を動かせたり、ケガのないように過ごしたりするために、広い場所をできるだけ用意することが必要である。また、変身したいという気持ちを満たすことができるよう、マントやズボンなどの変身グッズを用意するという方法もある。しかし、いつでもしたいことをしたいようにさせていることが援助ではない。遊んでいて良い時間なのか、今は違うことをすべきなのか、きちんと子

どもにわかりやすく伝えていくことも必要である。

そして、遊びを楽しむことと、生活習慣を身につけていくこと、ルールを理解していくことの両立を念頭に掲げて援助していかなくてはならない。その際、「注意する・止める・叱る」という行為を選ぶときがあるかもしれないが、その際には慎重になるべきだ。保育者のそのような行為は、子どもの人格形成にも影響を及ぼすことがあるとわかったからだ。些細な注意が大人になった今でも嫌な思い出として残っていることや、怒られたことをきっかけに、保育者の前では素の姿を出さないようになった、などといった例もあった。そのような事態を招かないようにするためにも、子どもの表面的な言動から判断して決めつけ、叱るようなことをせず、その言動に至る隠された思いを読み取る努力を絶えずしていきたい。止めざるを得ない場合には、ただ子どもの遊びを中断してしまうのではなく、子どものこうしたいという思いが発揮できるような代替案を考え提案していくことも一つの手である。また、危ないからといってすぐに介入してしまうのではなく、年齢に合わせて、自分たちで気が付けるよう見守ることも一つの援助法であると気付いた。

このように、戦いごっこには様々な意義が包括されている。そして、何よりも子どもにとって戦いごっこが大きな存在であることが明らかになった。その事実に対し、どのように保育者が援助を行っていくかは様々な方法がある。自分なりにたくさんの引き出しをもって、子どもの様子、時期、年齢など考慮し、日々熟慮していきたい。

参考文献

- ・峯克政、柴崎正行 『日本における子どもの戦いごっこ遊びの変遷』日本保育学会大会発表論文集 2004年
- ・小林紀子『「戦いごっこ」における遊びの流れを規定するもの:内的ルールの関連性を巡って』日本保育学会大会研究論文集 1994年